

イーハトーブ騒動記

はじめに

「あの日」から五年がたった。戦後日本の行く末を決定づけるとその時は誰しもが考えていたはずの「東日本大震災」——まるであの災厄が夢まぼろしでもあったかのように、記憶の風化がいま、加速しつつある。

「3・11」以降、この国はどう変わったのか。いや、変わらなかったのか。この物語は震災直後、詩人で童話作家の宮沢賢治の理想郷「イーハトーブ」の足元で繰り広げられた、見るも無残な光景を当事者の立場から再現する内容になっている。

賢治のふるさと——岩手県花巻市の行政と議会とが二人三脚で演じたこのドタバタ劇の予感
は実は震災前から感じていた。わたしは市議初当選後の一般質問で、沖縄の米軍普天間飛行場の「辺野古」移設問題に関連して、当局側の見解をこうただした。

「当地には岩手県でただ一つの飛行場がある。実現可能性の問題とは別に政治理念として、米軍基地の訓練の一部を受け入れる考えはないか」——。この時、真っ先にこの質問に批判の矛先を向けてきたのは意外にも共産党や社民党系の議員たちだった。

「他人の受難を対岸の火事」として黙殺する、いわゆる「ニンビズム」(ニンビー)の陥穽かんせいに革新系を自負する議員たちが陥っていることに驚かされた。そして、この狭隘な思考は「3・

11」を経験した後も変わることはなかった。

賢治は自作の詩「雨ニモマケズ」の中で受難者に「寄り添う」ことの大切さを「行ッテ」と直截ちよくせつに訴えている。『イーハトーブ騒動記』の中で暴かれた光景の数々はまさにこの精神の対極に位置していた。

政治学者の丸山眞男は杉浦明平の『ノリソダ騒動記』（一九五三年）について、「福江町（騒動の舞台の愛知県田原市）はまさに小文字で書かれた現在の日本国であり、逆に日本は大文字で書かれた福江にすぎない」（『丸山眞男集』第五巻）と書いている。この作品は海苔粗朶そだの漁業権をめぐる争いを描いた代表作である。

以下に紹介する騒動記も一地方都市での「茶番劇」として片づけることはできないという思いである。五年間の沈黙を破って、封印を解く所以はその辺にある。

「ワレラハ黒キツチニ俯ふシ／マコトノクサノタネマケリ」（賢治作詞「花巻農学校精神歌」）——。「マコトノクサ」の萌芽を摘み取るようなことがあつてはならない。

（文中に引用した会議録は話し言葉特有の反復や脈絡の欠落が目立つが、密室と化しつつある地方議会の審議の実態に少しでも触れてもらうため、出来るだけ原文に忠実に採録した。なお、文中の肩書、年齢などは執筆当時のままとした）

【目次】

はじめに ii

第I部 東日本大震災とニンビズム

プロローグ 2

第一章 騒動前夜―ある予兆 9

アラセブ（70歳）最後の決断 9

異次元の世界 12

かみ合わない「ニンビー」論争 15

ニンビズムの超克 23

「三車火宅」の物語とブドリ 29

第二章 「義援金流用」疑惑 32

デクノボー精神 32

あれっ、布団がない 37

義援金の怪 40

生死をさ迷った大謀 48

第三章 ドキュメント「さつさと帰れ！」 53

第一幕 幻と化した暴言 54

第二幕 弁論、そして論告求刑 72

第三幕 判決言い渡し 77

第四幕 場外論戦 投書合戦 99

第五幕 場外乱戦 PROG 炎上 104

第四章 その時、修羅の渚は 122

「白銀照男」物語 122

〈その一……消滅〉 122

〈その四……仲間〉 131

海をまたいだ「絆」 137

「311生の会」 140

捨てる神と拾う神 143

〈その二……神仏〉 126

〈その五……記憶〉 133

〈その三……夢枕〉 129

〈その六……紐帯〉 135

第五章 「義援金流用」疑惑その後 147

「疑惑」追及第二弾 147

迷走の果てに 154

ある良心 157

「公平の原則」 158

第Ⅱ部 「イーハトーブ」から「ニライカナイ」へ

第六章 「イーハトーブ」建国宣言 164

夢枕の賢治さん 164

ケガチ（飢餓）の風土 166

「嘯害地實見記」 168

「再度の決断」へ 171

賢治さんに聞く 172

第七章 「城盗り」攻防記 176

城跡にパチンコ店!? 176

「鶴陰」精神 177

花より団子 179

「おらが駅舎」物語 181

市民総決起大会 183

平成の「落城」 185

東公園と賢治 187

第八章 ドキュメント——論戦「安保・沖縄」 190

第九章 沖縄のこころ 206

もう一つの「ニンビズム」批判 206

「沖縄・辺野古」断章——ブログ「イーハトーブ通信」から 211

エピローグ 244

あとがき 252

【解説】 日本民主主義管見 鎌田 慧 257

第I部 東日本大震災とニンビズム

プロローグ——二〇一一年三月十一日午後二時四十六分

東日本大震災が発生したこの日、花巻市議会では三月定例議会の予算特別委員会が開かれていた。いま思えば、単なる偶然に過ぎないのだが、その時はまぎれもなく神意みたいなものを感じたのだった。わたしはその日、七十一歳の誕生日を迎えていた。

何かに突き動かされるような思いでわたしは冒頭に発言を求め、平泉・中尊寺を建立した藤原清衡きよひらや柳田國男の『遠野物語』、それに宮沢賢治などを引き合いに出しながら、市政の進むべき道について提言した。

おごり高ぶった人間の業ごうみたいなものへ警鐘を鳴らしたかったというのが、その時の気持ちだった。

つい十日ほど前、わたしは本会議の一般質問で「観光立市」にからめて同じ趣旨の質問をしたばかりだった。それでもなお胸のうちに残るものを感じていた。「誕生日という節目にもう一度発言したい。できれば冒頭に……」

予算委員長に頼み込むと「実はわたしも今日が誕生日なんですよ」と言って相好をくずした。

無所属議員にはめつたに回つてこない冒頭発言はこんな奇縁が幸いして実現したのだった。一般質問の要旨は次のような内容だった。

……殺伐とした現今の世の中にあつて、これからの観光は単なる物見遊山だけではなく、失われた価値観を求めるものになつていくのではないかと思ひます。ユネスコの世界遺産登録が期待される平泉の浄土思想（二〇一一年六月に登録決定）は、まさに平和へのメッセージです。平安時代の後期、清衡が建立した中尊寺の「落慶供養願文」には次のように謳われています。

「右、一音所覃千界不限、拔苦興樂、普皆平等、官軍夷虜之死事、古来幾多、毛羽鱗介之受屠、過現無量、精魂皆去他方之界、朽骨猶為此土之塵、毎鐘聲之動地、令冤靈導淨刹矣」

現代語に訳すと次のようになります。

「この鐘の一音が及ぶところは、世界のあらゆるところに響きわたり、苦しみを抜き、樂を与え、生きるものすべてのものにあまねく平等に響くのです。奥州の地では、官軍の兵に限らず、蝦夷の兵によらず、古来より多くのものの命が失われました」

「それだけではありません。毛を持つけだもの、羽ばたく鳥、うろこを持つ魚も、数限りなく殺されてきました。命あるもののみたまは今あの世に消え去り、骨も朽ち、それでも

奥州の土くれとなっておりませんが、この鐘を打ち鳴らすたびに罪もなく命を奪われしものたちのみたまを慰め、極楽浄土に導きたいと願うものであります」（佐藤弘弥訳）

清衡の心の中にはもはや敵も味方もありません。人間だけではなく、鳥獣や魚に至るまでこれまで罪もなく、苦しみのうちに命を落としたものたちすべてを極楽往生させたいという徹底した平和思想に貫かれています。

さて、『遠野物語』は昨年、発刊百年を迎えました。この物語は現代社会がどこかに置き忘れてきた何か大切なもの——たとえば、風土に刻み込まれた先祖の知恵とか共同体の絆きずなといったような、人間が生きていく上で手放してはならない価値観をいまに伝えていると思います。

そして、賢治が生まれた地元花巻は高村光太郎や新渡戸稲造とも縁が深い土地柄です。賢治は終生、「いのちとは何か」を自問し、戦時中に戦争協力詩を書いた光太郎は戦後、花巻の郊外で独居自炊の生活を送りながら平和を追求しました。

また、「われ太平洋のかけ橋とならん」と言った稲造は国際人として国際平和の実現に力を注ぎました。さらに峠をひとつ越えれば、全国に先駆けて老人と乳児の医療費無料化を実現した、故深沢晟雄村長（沢内村＝現西和賀町）の「生命行政」もあります。

賢治はややもすれば童話作家とか詩人という側面が強調されがちですが、『農民芸術概論綱要』の序論で「おれたちはみな農民である」と宣言しているように、その人生の大半



民宿の屋根に乗り上げた観光遊覧船（大槌町赤浜地区で）

は農民の救済に捧げられました。

「農民賢治」という側面に光を当てれば、賢治を軸に観光と農業をリンクさせることも可能になります。交流というキーワードを移住・定住化政策へつなげていくという幅広い視点が総合計画には必要だと思います。

以上、るる述べてきたように、平泉——遠野——花巻、そしてさらには沢内を結ぶ広域的な理念型観光がいま、求められているのではないのでしょうか。

人的資源だけではありません。この地はユネスコの無形文化遺産に登録されている早池峰神楽や鹿踊りしじりなど民俗芸能の宝庫でもあります。こうした理念型観光についての当局側の見解をお伺いします。

（会議録から）

議場全体が崩れ落ちるのではないかと思うほどの激しい揺れに見舞われたのは、その数時間後の午後二時四十六分のことだった。すぐ議席の下にもぐり込んだが、自分でも不思議なほど冷静だった。「それにしても神さまの悪戯いたずらにしては随分と荒っぽい誕生プレゼントだな」

その時、わたしの脳裏に一篇の詩が浮かんだ。賢治が「イーハトーブ」の実践を仮託した「雨ニモマケズ」である。

雨ニモマケズ 風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ 行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒドリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ クニモサレズ

サウイフモノニ ワタシハナリタイ

震災後、米国の首都・ワシントン大聖堂で開かれた「日本のための祈り」やロンドン・ウエストミンスター寺院での犠牲者追悼会などでこの詩が朗読された。

とくに、詩文の中の「アラユルコトヲ／ジブンヲカンジヨウニ入レズニ／ヨクミキシワカリ／ソシテワスレズ」……「ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ」という部分と「行ッテ」と繰り返し訴えかける文意――。

震災の記憶を風化させずに被災者に寄り添うことの大切さをこの詩から読み取ったのかもしれない。「雨ニモマケズ」はこうして、復興に向けたメッセージとして全世界に広がっていた。

しかし、肝心のその足元ではそんな動きに背を向けるかのような事態が進行しつつあった。世界の目が被災地に注がれていた時「イーハトーブ」の内部で一体、何が起こっていたの

か。「3・11」が図らずも浮き彫りにすることになるドタバタ劇の、まずは幕開け前の光景から――。

日本民主主義管見

鎌田 慧

増子義久さんの『イーハトーブ騒動記』は、彼が議席を置いている、岩手県花巻市の市議会のドタバタを描いた作品である。といっても、本人自身もその議会共同体の一員だから、同僚議員への批判はたちどころに槍の束のように本人にむかってくる。それも覚悟の出版である。

若いときから、あとさき考えることなく突っ張るのが、増子議員の本領である。というのも、三十代。「うるさ型」の記者時代のころから、その突っ張りを身近に視てきた筆者がいうのだから、まちがいはない。

福岡県大牟田市の三井三川坑の炭塵爆発事故を振りだしに、北海道夕張炭鉱の大爆発から閉山まで、日本炭鉱盛衰史を経めぐり、あるいは沖繩のさらに南西、さい果ての与那国島から北方四島までを踏破、この細長い弧状列島を駆け上り駆け下っては、たしかな記事を書く記者だった。だからキャリア十分、むかうところ敵はなし。市議会一年生であってもひるむことなく、疑問はとことん追求する。

その反骨ぶりは、新聞社にいて、九州の炭都大牟田から出発して、宮城の気仙沼、千葉の市原、北海道は根室、といわば辺境の一人勤務の支局に追いやられて、いつかな音をあげなかつた。

次から次にテーマを発見しては、地元の人たちに溶けこんでいた。わたしなども、根室のレボ船（密貿易）の船長を紹介してもらうなど、恩恵に預かっている。ほかにも、夕張炭鉱などを、一緒に取材に歩いていた、懐かしい記憶がある。

増子三兄弟、父親が戦死していたから、母親が女の細腕で育ててきた。それもあって、人懐っこくて、涙もろい。それでいて猛然、みさかいなくテキにむかっていく。いまでは絶滅危惧種のブンヤ魂だった。

退職後、故郷に帰ってちんまり暮らしているかと思いきや、七十にしていきなり市議に立候補、持ち前のうるさ型を発揮して、ついには議会で孤立無援、懲罰委員会にかけられ「戒告処分」。議会共同体を排除するには、保守も革新もない。満身創痍であっても諦めない。無鉄砲は筋ガネ入り、である。並み居る老獺先輩議員の誹謗中傷にもめげず、選挙の洗礼を受けて再選された。憎まれっ子世に憚るである。

増子「騒動記」は、戦後まもない民主化時代、愛知県は渥美半島・田原市で、やはり孤軍奮

聞した明平さんこと、杉浦明平の『ノリソダ騒動記』にたぶんに影響されている。風光明媚な西の渥美半島での、牧歌的闘争にたいして、かたや東北・岩手の地は、柳田国男の『遠野物語』の舞台であり、宮沢賢治を生み出した、ドリームランド「イーハトーブ」の理想郷でもある。

この理想郷にあって、賢治に心酔する増子記者改め増子議員が愛唱し、筆者も当人が熱唱する「ワレラハ黒キツチニ俯シ マコトノクサノタネマケリ」（賢治作詞「花巻農学校精神歌」）を聞かされたことがある。彼は東日本大震災のあと、救済ボランティア団体を組織し、種まく議員をつづけている。その涙と怒りの中間報告がこの記録である。

かつて二十年ほど前、おなじ東北の三沢市（青森県）でも、ひとつの騒動が持ち上がった。新しく市民運動から市議になった伊藤裕希議員にたいして、先輩議員たちが寄ってたかつて、「神聖な議場に「ノーネクタイ」で入場するのはけしからん」と、議場に入れない条例をつくって、集団的いじめをおこなっていた。

本人は市議会ホールで五日間のハンストで抗議、入場制限二議会に及んだが、ついに「ループタイ」で妥協、入場した。なんと頑迷な議会だったことか。新潟市議、静岡市議にもおなじ例があった。民主主義の殿堂・市議会には、服装の自由などなかったのだ。

ところが、「クールビズ」とかで、これまた不思議だが、国会議員たちが打ち揃ってノータ

イ姿になったのは、その少し後である。日本の議会制民主主義も、まるで学級会なみである。

国会に目を移してみれば、この大臣たちは、中学生の生徒会以下のレベルである。TPPの秘密を握っている経済再建大臣は、大臣室で業者から紙袋いりの現金をわたされ、そのままポケットにねじこんだ。それが露見して大臣は辞任したものの、「秘書が」「秘書が」と秘書に責任を押しつけたまま、責任逃れのまま国会議員の頬っかぶり。

さらに環境大臣は、フクシマ汚染地を一ミリシーベルト以下に抑えるなどとは、知ったこっちゃない、科学的根拠なし、と言いついていた。あまりの無神経ぶりを批判され、遂に謝罪。その一方、放送局を監督する総務大臣は、「偏向放送」は電波停止にするぞ、と権にかかって脅しまくっている。

さらにいえば、北方領土担当大臣の例もある。自分が担当する北方四島の「歯舞」の二文字が読めず立ち往生。はたして、国後、色丹、択捉なら読めたのかどうか。

甘利大臣以外は全員女性だった。任命権者の安倍首相、よりによって程度の悪い男を国際交渉の場に送ったばかりか、女性代表としての大臣たちが、あまりにもお粗末だったから、女性差別の言辞を引き出した責任は大きい。

なにしろ、米軍と一緒に戦争をするよう米政府に脅されて、憲法に違反する「集団的自衛権」を閣議でさっさと決め、国会多数を恃んで法律にしてしまうペラボウ内閣である。

なにをやっても正義だと思いきんでいる多数派は怖いものなし。NHK会長や日銀総裁、内閣法制局長官、国の重要な機関に息のかかった人間を送り込む、独裁政治が横行している。

だから、与党の退廃もさわまって、参院憲法審議会幹事が、恐れ多くも米国大統領を「奴隷の子孫」とハナ先で笑う発言をしたりする。

「民主主義ってなんだ」。若い学生たちの声が、国会を取り巻く非民主主義国家ニッポン。民主主義の現場たる地方議会も、まだなかなか民主化されていない。増子議員の市議会での暴露発言は、自治体にはいった義援金の行方の追及だったから、穏やかではなかった。深甚なる内
部告発だった。

杉浦明平の『ノリソダ騒動記』は、五〇年代はじめの漁業組合のボスにたいする漁民の抵抗を描いた傑作である。増子騒動記は、市がせっかく集まった義援金を、一般会計に繰り入れたスキャンダルを扱っているのだから、はねっ返りが大きい。それでもひるむことなく、議会で執拗に追及しているのだから、その勇猛果敢に拍手を送ろう。

「マコトノクサノタネマケリ」——。わが増子市議は、宮沢賢治の精神を胸に、今日も元気に活動しているのだ。

(かまた・さとし)

増子義久（ますこ・よしひさ）

1940年生まれ、花巻市出身。早稲田大学を卒業後、朝日新聞記者を35年間。定年と同時に故郷・花巻に戻り、約6年間、障がい福祉サービス事業所「こぶし苑」の施設長をした後、2010年7月の花巻市議選に「アラセブ（70歳）、最後の決断」を掲げて初当選。2014年7月には「再度の決断」に看板を塗り変えて再選。現在、二期目。

主著に『三井地獄からはい上がれ』（現代史出版会）、『賢治の時代』（岩波書店）、『東京湾が死んだ日』（水曜社）、『コタンに生きる』（共著、岩波書店）、『北島四島』（共著、朝日新聞社）など。

イーハトーブ騒動記

2016年3月1日 初版第1刷印刷

2016年3月11日 初版第1刷発行

著 者 増子義久

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1516-9 ©2016 Masuko Yoshihisa, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。